

第二学年国語科学習指導案

日時・場所 平成23年9月21日(水) 5校時 2年A組教室
学級 2年A組(男子7名 女子18名 計25名)
指導者 川口冬子

1. 単元名 古典に親しむ
教材名 徒然草

2. 単元について

(1) 教材観

本教材は、「読むこと」の指導内容「エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」に力を入れて指導しようとするものである。

何かの文章を読んでも、そのことを自分の経験や生活と照らし合わせて具体的な場面の一つとして想像できなければ、心に落ちることもなく言葉だけが通り過ぎていってしまうように思う。これが、最近目の前の生徒から私が感じている課題である。

「徒然草(第137段)」の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」は常識を覆す発想であり、最盛以外のときの価値を見出すという、生徒達の目を開かせる教材である。また、同じ趣旨の現代文を読むことで、昔も今も変わらぬ価値観があることに気づかせることができると思われる。賛否の意見を述べさせるときに、花見や月見は一つの例であって、部活動や行事への取り組みなど身近な例をヒントに挙げて生徒自身の経験と照らし合わせて考えさせたい。そして、試合や本番だけでなくその過程の大切さに思いを至らせたり、反対に、最盛こそ価値がある等の多様な意見があれば、さらに議論が深まると思われる。

(2) 生徒観

本校の生徒は8つの小規模の小学校から入学してくるため、中学校の集団の中で自分の考えを言葉で表現したり、意見交流を苦手とする生徒が多い傾向が見られる。本学級の生徒も、昨年度から意識的に話し合い活動を多く取り入れた授業を経験させることで、今ではだいぶ慣れてきており、特にも少人数での意見交流に楽しく取り組むことができるようになった。しかし、国語の基礎的・基本的な力が充分でない生徒も多く、話し合いの内容が深まりにくいことが課題である。

国語の力については、昨年度の県学調の結果によると「読むこと」に関しては、文章に即して内容をとらえることができる生徒が65.3%、心理描写や人物の変化をとらえることのできる生徒が54.2%、主題把握ができる生徒が79.1%であった。しかし、中心となる情をとらえることのできる生徒は20.8%、場面のようなすをとらえることのできる生徒は45.8%であるため、文章の内容を大まかにはつかめるが、内容を的確につかむことの苦手な生徒が多いことがわかる。また、「書くこと」については、自分の感じたことを素直に表現したり、読んだことをもとに自分と対比しながら表現できる生徒は52.1%である。また、文章構成を考えて的確に表現できる生徒は45.8%と少ない。「話すこと・聞くこと」については、友達の話聞いて考えの良さを十分理解できない生徒もおり(20.8%)、自分の考えを明確に話せる生徒も半分程度である。

さらに、昨年度実施したCRT検査の結果では、「話すこと・聞くこと」(全国比108)、「書くこと」(同102)、「言語事項」(同125)で全国比を上回ったが、「読むこと」(同98)で全国平均を下回っている。さらに、小領域で見えていくと、「論理の展開や構成を読み取ること」が全国比82と極端に低くなっており、文章を論理的に捉えたり、文章中に根拠を求めて読み取ったり表現する力が不足していると考えられる。

古典学習は、1年生で「竹取物語」と「故事成語」を学習したが、初めて出会った古典にも関わらず意欲的に取り組む生徒が多く、昔と現代のものの見方や考え方の相違点や共通点を積極的に見いだそうとすることができた。今回の学習では、文章を比べ読みして自分の考えを持たせ、交流させる場面を意図的に取り入れながら、自分の読みに深まりや広がりを感じて楽しさを味わわせたいと考える。男女の人数がアンバランスで、しかも人間関係によって交流の雰囲気左右されやすいという課題もあるが、普段から対話やグループでの話し合い活動を多く取り入れてきたため、古典教材であっても積極的な意見交流をしながら考えを深めさせたい。

(3) 学習観

古典というと、言葉遣いの違いから、「難しいもの」「現代とかけ離れたのもの」という意識を持っている生徒が多い。しかし、自然への関心、ものの見方や感じ方には、現代と変

わからないものもたくさんある。特に、「桜」に対する日本人の感覚は、今も昔も共通するものがあると思われる。それを表す古典と現代の文章を読み比べてみることで、ものの見方や考え方を古人と共有させたいと考えた。

在原業平の和歌「世の中に……」は、桜の散るのを惜しむ深い思いが込められており、西行の「ねがはくは花の下にて春死なん……」には桜に対する特別な日本人の感情が伺える。同じように、現代にも「桜」を題材とした歌がいくつもあることから、日本人の「桜」への深い思い入れが変わらずにあるのがわかる。また、「徒然草」の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」は、見えないものを想像して見ることで盛りを見ること以上に美を感じることができるという作者の美学を表しているが、それと同趣旨の現代文を読むことで、今も昔も変わらぬものの見方や感じ方を読み取ることができる。さらに、物事の最盛ばかりに価値があるのではない、という価値観について、具体的な例を挙げて自分の考えを述べたり、自分なりの思いを文章に書いたりすることで、古典作品を通じて考えを深めさせたいと考える。

3. 単元の目標

(1) 指導目標

① 古典に示された内容やものの見方や考え方について関心を持ち、意見や感想を交流しようとする。 【国語への関心・意欲・態度】

② 文章に表れている作者のものの見方や考え方を理解し、知識や体験と関連付けて自分の考えを持つことができる。 【C 読むこと エ】

③ 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、現代との共通点や相違点に気付くことができる。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 ア(イ)】

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①自分のものの見方や考え方を広くするために、意欲的に意見交流をしようとしている。	①文章に表れた兼好法師のものの見方や考え方について、自分の知識や経験と関連付けて感想を持っている。 ②他の生徒と交流し、自分の読みを確認しながら読み深めることができる。	①兼好法師のものの見方考え方を想像している。

4. 単元の指導計画・評価計画（全4時間）

次	時	学 習 目 標	評 価 規 準	評 価 方 法
一	1	単元の目標を確認する。 日本人の季節感について考えることができる。	・学習の見通しをとらえ、積極的に学習に取り組もうとしている。【関・意・態】 ・古典作品に表れられている季節感を想像することができる。【読】①	観察（発言の内容） ノート（記述の内容）
	2	随筆「出合いの花」を読み筆者の体験と思いをとらえる。 「徒然草」137段を読み、筆者の考えを読み取る。	・文章を読み比べながら、課題を意欲的に解決しようとしている。【関・意・態】 ・文章の概要を読み取り、根拠を明らかにして自分の読みを深めることができる。【読】①	観察（発言の内容） ワークシート（記述の分析）
二	3 本 時	随筆と「徒然草」の共通点を見つける。 兼好法師の「物事の始めと終わりにも価値がある」という考えについて自分の意見をもつことができる。	・文章から読み取った自分の考えを、他者との比較を通じて深化・拡充することができる。【読】② ・文章を手がかりにしながら、筆者の考えを想像することができる。【言語】	観察（発言の内容） グループ学習の観察
	4	「物事の始めと終わりにも価値がある～」という書き出しで意見文を書く。	・自分の考えが相手に効果的に伝わるように、根拠を明らかにして自分の考えを文章に表すことができる。【関・意・態】	ワークシート（記述内容）

5. 本時の指導

(1) 目標

兼好法師の「何事につけても最盛ばかりでなく、物事の始めと終わりにも価値がある」という考え方について、根拠を明らかにして自分の考えをもつことができる。

(2) 本時の指導構想と校内研究との関わり

本校の校内研究は、「自分の考え」を持ち、相手と関わり合って「意見を伝えたり聞き合っ
て交流する」ことにより、「考えが深まる」一連の流れを授業に取り入れることである。そこで本時は、古典に表れたものの見方や考え方をとらえさせ、それに対し自分の考えを
持ち、他と意見を交流し合うことで、考えをより深めさせることをねらうものである。その
ために、確かで豊かな国語の力をはぐくむための四要素（話すこと・聞くこと、読むこと、
書くこと、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）を一単位時間の中に盛り込んだ。

(3) 本時の評価の観点と具体的評価規準

A ; 十分満足できる	B ; おおむね満足できる	C ; 支援を必要とする生徒への手立て
自分の考えや心情が伝わるように既習学習を活用しようとしている。	仲間との交流の中から参考となる意見や表現を自分の表現に取り入れようとしている。	自分の考えが仲間と同じか違うかに注目させ、自分の考えに取り入れさせる。
兼好法師の生き方や時代背景も考慮しながら自分なりの解釈をし、作者の思いについて自分の考えを持っている。	テキストをから作者の思いについて自分なりに解釈を加え感想や自分の考えを持っている。	興味を持つ例に線を引かせ、その理由を考えさせる。

(4) 本時の展開

段落	学習活動	学習内容	指導上の留意点 (○研究の視点 ◇評価)
導入 [5分]	<p>1. 前時に学習した安西篤子の随筆「出会いの花」の筆者の体験と思いを想起する。</p> <p>2. 学習の流れや目標を確認する。</p>	<p>・想起のポイント</p> <p>ア 花がまだ咲かないときと、満開のときの旅の違いは何か。 イ 思い出に残っている方の理由は何か。</p> <p>・読み比べの目的 「兼好法師と安西篤子の考えの共通点を見つける。」</p>	<p>・花が咲かない吉野への旅と満開の時に行ったこととを比べ、咲かない桜を想像したときの方が思い出に残っている理由を想起させる。</p> <p>◇発言の内容</p> <p>○学習のスタートとゴールを明確に示し、具体的な学習のイメージができるようにする。</p>
兼好法師の考え方について、根拠を明らかにして自分の意見を持つ。			
展開 [38分]	<p>3. 「徒然草第137段」「花は盛りに……」を教師の範読に続いて音読する。</p> <p>4. 口語訳を見て意味を確認する。</p> <p>5. 「徒然草」と随筆の共通点を見つける。</p> <p>6. 「最盛ばかりでなく物事のはじめと終わりにも価値がある」という兼好法師の考え方についてどう考えるか。</p> <p>7. 意見交流をする。</p>	<p>・音読でおさえる点</p> <p>ア 歴史的仮名遣いを正しく読む。 イ おおよその意味がつかめるように考えながら読む。</p> <p>・検討の視点</p> <p>ア. 具体例や体験を交えて意見を学習シートに書く。 イ. 兼好法師の考え方に共感できるかできないか、立場をはっきりさせて自分の意見を書く。</p> <p>・兼好法師の考えに共感できるかどうか、どちらかの立場にたって根拠を明らかにし、意見を交流する。</p>	<p>・文語の細かな説明はしない。おおよその意味がつかめるようにする。</p> <p>・どちらも最盛のとき以外の趣に心を惹かれていることに注目させる。</p> <p>◇発言の内容</p> <p>・花見のことだけでなく、身近な生活の中にこのような例や体験がないか考えるように促す。 例) 部活動, 学校行事</p> <p>◇記述の内容 ◇発言の内容</p> <p>・本居宣長の例(玉勝間第231段)を紹介し、兼好法師の考えに賛成だけでなく反対の立場で意見を書いて良いことを伝える。</p> <p>○ルールに沿って話し合いを進め自分と相手の意見の共通点や相違点を考えさせる。</p> <p>◇グループ学習の観察</p>
終末 [7分]	<p>8. 出された意見に感想を述べ合う。</p> <p>9. 本日の課題と次時の予告を知る。</p>	<p>・本時のまとめ</p>	<p>○自分の考えをはっきりと発表させる。</p> <p>○課題を伝える。</p>

○「徒然草」第三百三十七段（兼好法師）

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障ることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひはさることなれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。よろづの事にも、始め終はりこそをかしけれ。

【口語訳】

桜の花は満開だけを、月は満月だけを見て楽しむべきものだろうか。（いや、そうとは限らない。物事の最盛だけを觀賞するのがすべてではないのだ。）

たとえば、月を覆い隠している雨に向かつて、見えない月を思いこがれ、あるいは、簾を垂れた部屋に閉じこもり、春が過ぎて行く外のように目を確かめることもなく想像しながら過ごすのも、やはり、優れた味わい方であつて、心に響くような風流な味わいを感じさせる。

今にも花開きそうな蕾の桜の梢や、桜の花びらが落ちて散り敷いている庭などは、とりわけ見る価値が多い。作歌の事情を記した詞書も「花見に出かけたところ、もうすでに花が散ってしまっていて見られなかった」とか、「用事があつて花見に出かけず、花を見なかった」などと書いてあるのは、「実際に花を見て」と書くのに、劣っているだろうか。そんなことはない。

確かに、桜が散るのや、月が沈むのを名残惜しむ美意識の伝統はよくわかる。けれども、まるで美というものに無関心な人間に限つて、「この枝も、あの枝も散ってしまった。盛りを過ぎたから、もう見る価値はない」と短絡的に決めつけるようだ。

何事においても、最盛そのものではなく、最盛に向かう始めと最盛を過ぎた終わりとが味わい深いものなのだ。

人と人に出合いがあるように、花と人にも、幸運な、また不運な出合いがあろう。

むかし、友人と二人で吉野の花を見に行ったことがあった。途中の電車が思いのほか空いていたので、やや不吉な感じがしないでもなかった。ケーブルで吉野山駅に着き、少し歩いてみたが、いつこうに花が咲いていない。開花期に早すぎたのである。

よく見ると、苔はすでにふくらみ切っている。二、三日もすれば、いや気温が上がれば明日にでも、いつせいにほころび始めるに違いない。私どものような真拔けな花見客は、めったにいないとみえて、あたりはひっそりと静かで、人影もない。桜の咲く直前の吉野山を、花を求めてうろろろしている二人連れは、傍目にはさぞこっけいに見えることだろうと思うと、情けないのを通り越して、おかしくてたまらなかった。

それでもせっかくなのだから、たとえ一輪でもよい、咲いている花を見たいものだ、という気になった。しかし、どこまで行っても、花は苔のままである。

微笑を含んだ美女の口元のように、苔はまさにほころびかけているのだが、開くには至らない。むろん、奥に行けば行くほど、苔は固くなる。吉野山に桜樹は何本ぐらゐるのだろうか。俗に下、中、上、奥、それぞれ千本と呼ぶ。その何千本かの桜の中に、一輪ぐらゐる咲いているのがあってもよさそうなものだと思うのだが、とうとう見つけることができなかつた。山中の店でひどくまずいラーメンを食べさせられた話は、ほかでも書いたのでここでくり返すことはない。

笑うべき失敗談として、この吉野行きを、私はよくいろんな人に話した。けれども、最近になつていくらか考えが変わつた。

吉野山で桜を見損なつたあと、私は諦め切れないまま京都へまわり、折しも盛りの祇園のしだれ桜を見て、ようやく溜飲を下げた。また、翌年はよく調べて吉野の桜の満開時に出かけ、一泊してこころゆくまで花をめでた。ところが後になってみると、そのときの吉野の花の印象が薄い。むやみに人が出て、不愉快な喧嘩ばかりが記憶に残り、花の美しさは忘れてしまった。これは弘前城の桜を見に行ったときも同様である。花時を見計らつて早くから宿をとり、東京から出かけていったのだが、酒を飲んで浮かれ騒ぐ人ばかり多く、花を楽しむどころではなかつた。しかも宿は満員で、私と友人はふとん部屋のような狭い一室に寝かされ、不潔な毛布をかぶつてふるえながら一夜を明かす始末だつた。

むしろ、花を見ることができなかつたあの年の吉野がなつかしい。その日、私はひたすら幻の花を追って歩いた。霞のようにむらがり咲く花をまぶたの裏に描いて、山々谷々をめぐつた。花の咲いていない古木の下に立つて、咲き満ちた桜の華麗を想像した。

たぶん、私の心の中の花は、現実の花よりはるかに豊かで明るくかがやかしかつたのである。こうもあつてほしいという花を、私は心に思い描いたのだから。

一輪の花にも出合わなかつたにもかかわらず、私は花を満喫して山を下りたと思われる。そのため、私はいつまでもあの日を忘れられずにいるのではあるまいか。(後略)